

ーこれからのインクルーシブ教育を見据えてー
「子供とつながる・子供をつなげる」
～多様性を認め合う集団づくりを中心に～



令和3年1月
岡山県総合教育センター

はじめに

平成19年(2007)に法制化された特別支援教育が始まって13年が経ちました。

岡山県総合教育センターの研修講座や研究においても、個の教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方や、特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり等について取り組んできました。

また、現在、国際社会において「共生社会の形成」が目指されています。そのために国際的にも障害の捉え方が、「医学モデル」から「社会モデル」へと転換され、多様性を前提とした社会の在り方、誰もが過ごしやすい環境の在り方がより一層重視されるようになってきています。

学校教育の場においては、これまでの特別支援教育の実践を通して、個の困難さに焦点を当てた指導・支援の在り方について周知され、個別指導や視覚的な支援等、様々な工夫が見られています。しかし、子供一人一人の物事の見方や考え方は、実に多様であるため、子供を十分に理解することが難しく、困難さに応じた指導・支援を行ってもうまくいかず、学級づくりや授業づくりに苦慮されている現状もあるのではないのでしょうか。

このような状況とこれから向かう共生社会が、人々の多様な在り方を相互に認め合える社会であることを考えると「多様性を認め合うこと」が大切であると考えられます。

今回、発刊するブックレットは、「多様性を認め合える集団づくり」をテーマにした実践を中心に内容を構成しています。「共生社会の実現」に向けて、子供一人一人を大切に思い、関わっておられる先生方の一助となればと考えています。

ブックレットの活用にあたって

このブックレットでは、共生社会の形成に向けて学校教育で大切にすべきことを示した<理論編>とその理論に基づいた指導の実際を紹介した<実践編>で構成しています。ニーズに応じて、必要なページを開いてご活用ください。

<実践編>では、第2章で通常の学級における「多様性を認め合う集団づくり」、第3章で「通級指導教室と通常の学級との連携」、第4章で「交流及び共同学習の在り方」について具体的な取組を示しています。自分の担当する学びの場はもちろんのこと、他の学びの場の実践もご覧いただき参考にしてください。



ブックレットの内容を
より深めるために活用
してください。

チェック

付属の資料はQRコード
で確認できます。



QR



目次

*はじめに	…
*ブックレットの活用にあたって	…
<理論編>	
第1章 共生社会の担い手の育成	… 3
1 目指すべき共生社会	
2 学校教育で大切なこと	
<実践編>	
第2章 通常の学級	… 8
つながるその瞬間をとらえて	
1 実践事例	
*実践事例を読むにあたって	
事例1「さぼっていたんじゃないっ!」	
事例2「えっ、人に頼ってもいいの」	
事例3「今、よく我慢してたね」	
事例4「これならできる」「これでもできる」	
事例5「ルールを守ることは大切…でも」	
2 多様性を認め合う集団づくり	
3 Q&Aコーナー	
第3章 通級指導教室	…22
1 通級による指導とは	
2 実践事例	
3 「連携」を在籍学級全体の指導につなげる	
* コラム①「人に迷惑をかけるな」という価値観	
* 「連続性のある多様な学びの場」	
* コラム②「～新たな学びの場「特別支援教室」の取組～	
4 Q&Aコーナー	
第4章 交流及び共同学習	…32
1 交流及び共同学習とは	
2 確かな学びにするために	
3 実践事例	
4 交流及び共同学習と学級経営	
5 Q&Aコーナー	
共生社会の形成に向けて ～「子供を理解する」「つなげる」～	
*おわりに	
*参考文献	

<理論編>

第1章

共生社会の担い手の育成

この章の登場人物



通常の学級担任
千太先生
【採用二年目】



教授
スーパーバイザー
特別支援教育のスペシャリスト

1 目指すべき共生社会



通常の学級担任
千太先生

私の学級には発達障害等、困難さのある子が複数名いて、どのように学級経営や学習指導をしていけばいいのか悩んでいるのですが…。

困難さのある子をどのように理解し、指導、支援すれば良いか迷うことはたくさんあるでしょう。では、私と一緒にどう関わっていけば良いか考えていきましょう。まずは、少し視野を広げ、今社会が何を目指し、どこに向かおうとしているか見ていきましょう。



目指すべき「共生社会」とは

これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会のこと。

それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会のこと。

〈共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）〉

今私たちが目指しているのは、まさに上記のような共生社会です。このような社会を実現するためにも、「障害の捉え方」が変わったことを理解しておく必要があります。



「障害観」の変化

※「障害者の権利に関する条約」



聴覚障害者が、講演会に参加したいが手話通訳がないという状況を考えてみましょう

医学モデル

障害は、**障害者本人の身体に存在している疾患**によって生じるもので、本人に対する治療や訓練によりなくすべきもの。



「聞くことが困難」であるので仕方がないと考え、手話通訳を用意することは「恩恵的な特別な措置」と捉えます。



そもそも「聴くことが困難」なのに講演会の参加は難しいわよね。



社会モデル

障害とは、何らかの機能制限のある人が、そこに**参加することを前提としていない社会の在り方**によって、他の人と同じように地域社会に参加することが制限されること。



そもそも主催者が、多様な参加者を想定していないことで現れる「社会的障壁」であり、それを除去するために手話通訳を用意することは当然のことであると考えます。



いろいろな人が参加するのは当然だから、手話通訳は用意しておかないと。

ここでポイント

あらゆる人の参加が想定をされていない社会の在り方、環境によって「社会的障壁」が現れ、それによって「障害」が生じるという考え方です。「環境との関係性」から「障害」を捉えていくことが大切であるということです。ここでいう「環境」とは「物的な環境」だけでなく、人の概念、価値観等の「人的な環境」も含まれます。

つまり、共生社会は・・・



社会そのものが、あらゆる人のことを想定したものであれば、障害の有無に関わらず全ての人が過ごしやすい幸せな生活を送れるというものです。一人一人の思いや願いを叶えやすく、過ごしやすい社会が共生社会です。

このような社会を作るためにも、一人一人の周りの環境を整えることが重要です。それは、あらゆる人が利用しやすい物的環境と併せて、「他者の多様な在り方を認め合い、受け入れる」人の考え方や価値観といった人的環境を整えていくということが大切になります。特に、考え方や価値観については、幼い頃から様々な経験をしたり、多様な価値観に触れたりすることを通して培われていくものです。これからこの共生社会を担っていく子供たちに、学校教育で意識的に取り組んでいく必要があるのです。



なるほど。環境によって障害が生じるということは、環境そのものを「多様性を認め、受け入れることができるようなもの」に整えることがとても大事なんですね。

その通りです。そのために学校教育では、何をどう進めていけば良いのか、見ていきましょう。



2 学校教育で大切なこと

学校教育においては、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進（報告）」（中教審）が示され、取組を続けてきています。



インクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進

ポイント

（中教審初等中等教育分科会報告）平成24年



可能な限り
「共に学ぶ」ことの追求

教育的ニーズに応える指導を
提供できる多様で柔軟な仕組みの整備

このような中、今までの特別支援教育の取組を振り返ってみると、「個へのアプローチ」を中心に考えた取組が多かったように思います。しかし、「共生社会の担い手の育成」を考えると、それにプラスして「集団へのアプローチ」が重要になってきます。



個へのアプローチ

教室環境の整備、支援グッズの活用、
困難さの克服・改善 等

通常の学級在籍
困難さのある
Tさん



困難さの軽減

〇〇があれば
できるようになる



困難さを克服・改善し
できるようになる



Tさんの困難さに着目して、
それに対する指導・支援を
行う考え方だね。こういった
ことは、今まで取り組ん
で来たことだね。



通常の学級担任
千太先生

＋ プラス

集団へのアプローチ

多様な在り方を
認める意識の醸成

一人一人の困難さの理解
助け合う風土

困難さの軽減



集団が一人一人の困難さを
理解して受け入れたり、手
助けしたりすることで困難
さが軽減する考え方だね。
これはあまり意識できてい
なかったかも！



多様性を認める、
受け入れる集団

ここでポイント

特別支援教育と言えは、今まで個の困難さに着目して、それに応じた指導・支援（教室環境の整備、支援グッズの活用、困難さの克服・改善等）を行っていくことに焦点を当てがちになっていたと思います。これは、とても大切な視点です。

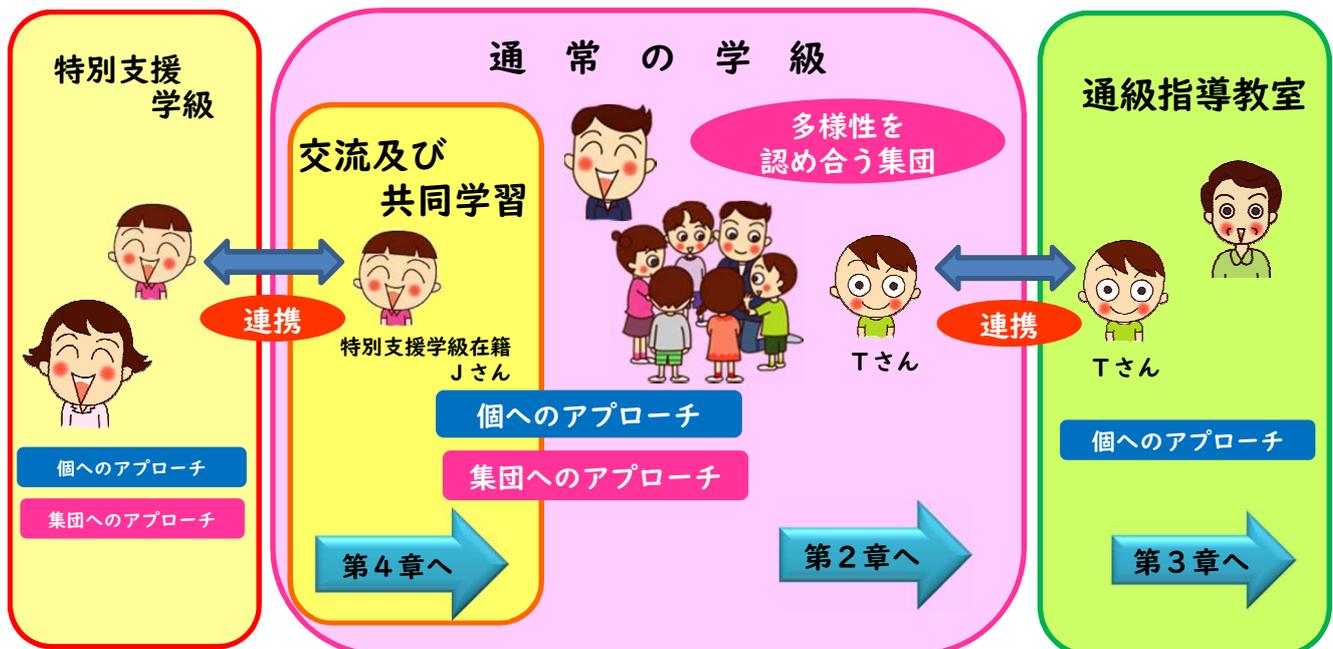
しかし、これからはそれに加えて、集団の考え方や価値観が「多様性を認め合う」ものであることが重要になります。そのような意識を醸成するためにも、集団へアプローチしていく必要があります。これは、人権教育や生徒指導等で今まで行ってきたところでもあるでしょう。



なるほど、「個へのアプローチ」に加えて、多様性を認め合う集団をつくっていくために「集団へのアプローチ」が大事になってくるのですね。ですが、具体的にどこでどのような取組をしていけば良いのでしょうか…。

そうですね。このような取組は、学校教育の様々なところで意識的に取り組んでいく必要があります。ここからは、次の三つの取組を通して、通常の学級において、「集団へのアプローチ」をどのようにしていけば良いのかを中心に見ていきましょう。

- ★ 通常の学級での多様性を認め合う集団づくりについて
- ★ 「個へのアプローチ」を中心としている通級指導教室と通常の学級との連携について
- ★ 特別支援学級の児童生徒が共に学ぶ、交流及び共同学習の在り方について



第2章

<実践編>

通常の学級

「つながる」 その瞬間を 捉えて…

友達の苦手を受け入れる子供たち

算数の時間。声の小さなAさんが発表する場面。少しざわついた教室の雰囲気が、すうっと静かになりました。消え入るような小さな声で「3cm3mmです。」と答えました。周囲の児童は、「お~合っています。」「いいよ。」と声を上げます。誰も「聞こえません。」「声が小さいです。」という反応はありません。そこには、どうすれば小さな声を聞き取ることができるかを考える周囲の子供たちの姿がありました。

【小学校 低学年】



友達の思いを汲み取る子供たち

特別支援学級に在籍するBさんが、道徳の授業で発表する場面。一生懸命に発表しようとしていますが、うまく言葉になりません。すると、前の席の友達が、「それってこういうことかなあ。」と言いたかったことを予測して声を掛ける姿が見られました。Bさんは「うん。」と言い、納得して着席しました。担任は「Bさんの言いたいことは、よく分かったよ。」と話し、声を掛けた児童には、「友達の話をよく聞いてみんなに教えてくれたね。」と伝えました。

【小学校 中学年】

友達の良さを認める子供たち

気持ちが不安定になりやすく、特にグループでの学習が苦手なCさんが「山の学校」のスタンプを友達と計画する場面です。「ブラックボックスクイズ」を行う際の役割分担をすることになりました。誰が何を準備するかを話し合う時、友達が「Cさんは、工作が好きよね。休み時間も色々な物を作っているし。Cさんにブラックボックス作りを任せてもいい？」と尋ねると「いいよ。」と快諾しました。作ったブラックボックスをいつも準備して「これ、作ったんですよ。」と満面の笑みで練習に向かう姿が見られています。

【小学校 中学年】

「つながる」



できる方法を見つける子供たち

算数の少人数指導の場面。算数の学習については自信のないDさん。適応題も一つできたら「先生、できました。」と先生を呼び、答えが合っているのかを確認しようとしています。丸をもらえると次の問題に進んでいます。続いて適応題の確認の時間。Dさんはすでに丸をもらっているのですが、なかなか発表ができずにいました。すると、ある児童から「先生、二人で発表だったらだめかな？みんな発表すると思うよ。」という意見が出ました。「それ、いいね。」とみんなから声が上がると、Dさんは「それなら…。」と挙手をし、ペアで協力して発表することができました。

【小学校 高学年】

友達に応じて声かけを考える子供たち

社会科の時間に先生からワークシートが配られました。なかなか言葉で自分の意思を表現しにくいEさんにワークシートが配られていないことに気付いた友達が、「Eさん、配られていないと先生に言った方がいいよ。」と伝えました。Eさんは、驚いた表情を見せた後、頷きはしたのですが、先生に伝えられずにいました。すると、また別の友達が、黒板の下を指さしながら、「あそこ。」とワークシートのある場所を教えていました。Eさんは、ワークシートのある場所に視線を移すと、自分で立ち上がってワークシートを取りに行き、素早く着席しました。

【小学校 高学年】

Ⅰ 実践事例

*実践事例を読むにあたって



どれも子供たちが、一人一人の友達を理解して関わっている素敵なエピソードですね。でも、どうすればこのような学級集団が育つのでしょうか。

そうですね。実践された先生がどんなことを大切にされているのかを知りたいところですね。別の事例を通してもう少し詳しく考えていきましょう。ここからは、五つの実践事例を紹介します。事例は大きく二つの視点から多様性を認め合う集団づくりにつながる実践をエピソード形式で示しています。下に示したのは、二つの視点と掲載している事例の概要を整理したものです。



視点① それぞれに共通する困難さを共有できるようにつなげる



◆視点①の事例の概要◆

- <事例1> いつもと様子の違う友達の背景理解と個に応じた関わり方を考える
- <事例2> 一人で全部できなくても、人に頼ってできることも大切である価値観の共有
- <事例3> 友達の伸びに着目し、肯定的に受け止める集団の価値観の醸成



視点② 集団として大切にしたい価値観について子供と考える

◆視点②の事例の概要◆

- <事例4> 多様な学び方があっても良いという価値観の共有
- <事例5> 状況によってはルールに幅をもたせることも良いという価値観の共有



特に注目したいのは、集団に働きかける際の「教師の思考」と「子供とのやりとり」です。それらをエピソードで示し、可視化しています。



エピソード

特別支援学級のAさんは、交流学級で給食を食べることになっています。第3学年になったばかりの1学期の初め、月曜日の給食の時間のことです。

子供:「先生、Aさんがいません。」

子供:「先生、Aさんは、廊下にいます。でも、じっとして動かないよ。」

クラスの子供は騒然としています。

廊下を見ると、うずくまるAさんの姿がありました。

子供を理解する

何に困っているのだろうか。

言葉で伝えられないから、うずくまっているのかもしれない。

どうして良いか分からないから切り替わらないのだろう。



担任:「大丈夫？」

と声を掛けました。Aさんと話をしていくうちに今日は、久しぶりの給食当番でさらに月曜日だからつい忘れてしまい、友達に「さぼるな。」と注意をされたことが分かりました。

通常の学級担任

集団で共有したい困難さを明確にする

「さぼろうとしたのではない」ことや、うまく伝えられずみんなに分かってもらえていないAさんの事情や気持ちも分かってほしいな。



共有し、つなげる

担任:「Aさんは、どうして教室に入れないでいるのかみんな分かる？」

子供:「何か困ったことがあったのかな？」

担任:「Aさんは、今日から給食当番なのですが、当番を忘れていたようです。でも、注意されてうまく自分のことを説明できなくて分かってもらうことができず、つらい気持ちになっていたようです。そして、気持ちも切り替わらずに廊下にいるようです。」

子供:「そうだったんだ。今日は、月曜だしね。僕も忘れそうになることがあるよ。」

「うまく気持ちを伝えられないこともあるよね。」

という声が上がりました。

担任:「そういうこともあるよね。今、廊下でじっとしているのは、うまく伝えることができなかったからだね。」

教室に戻ってきてほしいけれど、みんなは、どうしたら良いと思う？」

とクラス全体に投げかけると、

子供:「さぼったんじゃないことは分かっているよと伝える。そして、教室に入ってきやすいように自然にする。」

と答えました。

担任:「友達に何かあった時には、『なぜそうなったか』『自分はどうすればいいか』を考えることは大切かもしれないね。」

さぼっていなかったことをみんなに理解してもらったAさんは、数分後、教室へ入り給食をおいしくいただきました。



日々の学級経営で…

日頃から、子供の得意なこと、不得意なこと、困難さ、物事の捉え方等を理解するように心掛けています。子供たちに何か起こった時には、日頃の理解を基にしながら、「なぜこのような状態になったのか」「何に困っているのだろうか」と思いを巡らせながら行動の背景を見つめるようにしています。そして、子供たちとは、困っている子供の背景にある困難さを共有し、「自分達はどう関われば良いか」を共に考えることを大切にしています。そういった友達の理解や温かい行動によって、一人一人の子供の困難さは軽減すると考えています。

「えっ、人に頼ってもいいの」

エピソード

帰りの会でしばしば帰りの準備が間に合わない小学校3年生のBさん。
繰り返し指導していますが、なかなか一人では準備に時間がかかる状況が続いています。

子供：「Bさん、もう下校時刻が来るよ。ちょっと急いで。」

Bさん：「う～ん、こんなに机がぐちゃぐちゃで、もう帰れないよ。」

とBさんは泣きそうな声で言いました。



子供を理解する

片付けの手順をいつも視覚的に示しているけれど、難しそうだな。



通常の学級担任

帰りの準備だけではなく、授業や他の生活場面でも整理整頓や片付けの優先順位をつけることが難しく、困っているBさんの姿が見られることもありました。

また、周囲の友達から急かされる状況もしばしばありました。

大切にしたい価値を明確にする

誰もが得意、不得意なことがあることや、困った時には人に頼っても良いことをみんなに理解してほしいな。



共有し、つなげる

担任：「Bさんは、片付けるのが苦手なんだね。先生も子供のころ苦手だったから分かるよ。」

Bさん：「私は、頑張ってもできない。」

担任：「そうか。頑張ってもどうしてもできないことはあるよね。みんなもそういうことあるかな？」

子供：「そんなのあるに決まっとる。」

担任：「そんな時、どうするの？」

子供：「ちょっと手伝ってもらおう。」

担任：「先生もね。大人だけど『ちょっと助けて』って言うよ。苦手なことは、得意な人に少し助け
てもらおうといいよね。」

Bさん：「そうなの。助けてもらってもいいんだ…。」

担任：「うん。だからBさんもちょっと助けてって言ったらいいよ。はいっ、ちょっとプチ練習。」

Bさん：「ちょっと助けて。」

子供：「いいよ。鞆に入れる物は、お手伝いするよ。でも、ロッカーの物はBさんできるよね？」

Bさん：「うん。それは、大丈夫。ありがと…。」

Bさんは、勢いよくロッカーに向かって行きました。



日々の学級経営で…

困った時に「ちょっと助けて」という援助要求をすることは大切です。そのためには、学級の一人一人が、「誰にも苦手なことがある」と捉え、その苦手さを学級で共有していくことが必要だと考えています。そして、「困ったら人に頼っても良い」「人に頼られたら応じる」といった学級集団の風土を日頃から醸成しておくことが重要であると思います。このような「困った時に、助け合ことのできる学級集団」であることが、個々の困難さを軽減することに繋がると考えています。また、友達のことを知り、本人が必要なサポートは何かを互いに理解できるようになるといいなと考えています。

事例

3

「今、よく我慢してたね」

～長期的な取組を通して～

エピソード① ～担任とCさんとの関係づくり～

小学校第6学年。友達とのトラブルが多く、失敗や間違いを他人のせいにして、友達から叱責されたりすることが多いCさんを担任することになりました。

授業場面では、指名をされていないのに話し続けたり、友達が発言している時に、「俺は違うな。」とコメントしたり、手を挙げても自分が当たらなかったら怒ったりするので、周囲の子供から注意をされることもありました。すると、行動はさらにエスカレートをしていくことがしばしばありました。

他の友達に迷惑をかけることになるので注意をするのですが…。それだけでなくCさんの行動をどのように理解し、どのように関われば良いのかを考えました。

子供を理解する

自分を認めてほしい気持ちが人一倍強いのかな。まずは、Cさんが「担任は、味方である」と思える関係作りから始めようかな。



通常の学級担任



まずは子供との良い関係づくりに注目したことは、大切ですね。

私は「学級開き」で語った「大切にしたいこと」の視点から最低限の注意はしましたが、同時に、

- ①最初が肝心なのもっと強い指導をすることが必要か。
 - ②Cさんを注意し、指導しないと同僚や学級の子供から信頼を失うかもしれない。
- という思いもあり、焦りもありました。



エピソード② ～子供と子供との関係づくりⅠ～

Cさんとは、特に「個別の時間」をとって関わるのではなく、休み時間に他の児童も交えて友達とドッジボールを一緒にしたり、雑談をしたりしました。しかし、授業では、一番に発表できないとふてたり、友達の発表に被せて発言したりすることは続きました。それでも、学級の子ども達の中には、Cさんの話を聞いたり、さらに意見をつなげたりする児童もいたので、その状況を次の指導に生かしたいと考えました。

学級全体に対して「話を聞くこと」を価値付けたいな。Cさんと関係性が少しできたという感覚があるので、前向きな提案を試みようかな。



そして、担任が「Cさんの意見を聞いて、さらに意見が繋がったね。しっかり話を聞いていたらいい意見がリレーのように繋がるね。」「話を聞く人がいるから、意見が安心して言えるんだよね。だから話す人、聞く人も大事。」等、全体指導の中で、良い聞き手になることの価値付けをしました。Cさんにも「次は、良い聞き手にチャレンジするのはどう？」とそれとなく話をしていきました。Cさんは少し考えてからうなずきました。

「あっ、いきなりできなくてもいいからね。やろうと挑戦するだけで先生はうれしいよ。」

と、担任が最後に一声かけました。



関係性が基盤にあるので、担任の先生の提案も受け入れやすかったのではないのでしょうか。

Cさんの良さを認めながらも、同時に友達の意見を最後まで聞いて、大切にすることの良さを意識して価値付けました。



エピソード③ ～子供と子供の関係づくりⅡ～

Cさんは、発問に対して我先にと発言する姿や挙手して指名されないとイライラする態度を見せる姿は続いていました。そんな時には、Cさんに注意をしたり、「また始まった。」と冷ややかに受け止めたりする反応を示す子供達も見られました。しかし、人の発表を聞いたり、『質問タイム』まで黙って聞いたり、Cさんなりに頑張っている姿を見せることもありました。

大切にしたい価値を明確にする

Cさんが努力をしていることは言語化して学級全体に伝えたいな。
完璧にできなくても、成長していることに注目し、認めることができるような学級集団になってほしいな。



共有し、つなげる

担任：「今、言いたい気持ちを『ぐっ』我慢してたね。先生には、分かるよ。」

「今、うっかりと友達の発表の時、声を被せてしまったね。正解して嬉しかったんでしょ。」とCさん本人に伝えるだけでなく、全員に聞こえるように話しました。Cさんは、しまったという表情をした後、キョロキョロと周りの様子をうかがっていました。

担任：「Cさんは、聞くことを今頑張っています。だから褒めました。」

ただ、どうしても自分の意見を伝えたい気持ちが抑えられない時もあるよね。

自分の頑張りたいことをいつも100%達成ってみんなはできる？」

子供：「それは、無理。」

担任：「では、先生も経験あるんだけど、もし悪気がなく夢中になりすぎて発表の途中で声が出てしまったらみんなならどうする？」

子供：「ごめんって軽く言う。」「黙って頭を下げる。」「合掌(笑)。」

担任：「でも、ちょっと恥ずかしいなということもあると思うけど、そんな時は？」

子供：「黙って反省。次、気を付ける。」

担任：「なるほど。色んな方法がありそうだね。共通しているのは、うっかりしてしまった後にどうするかを考えて、自分ができる行動をするってことが大切ってことだね。」



Cさんに直接「こうしたらいいよ。」というアドバイスのできる集団づくりも大切です。今回は、子供の関係性を考慮して、Cさんの困難さを共有し、「みんななら、どうする？」と集団に問いかけ、一人一人が考えることで子供同士をつなげようとしていました。Cさんも、友達の話を聞いて、具体的にどうすればいいかに気付けたのではないのでしょうか。

きっかけはCさんの話題でしたが、学級全体の話題につなげ、考える場を作ることで、学級集団全員に自分事として考える機会としました。



教えて！
教授

まずは、子供の行動の背景要因を理解し、子供と関係性を築いていくことが大切です。その上で、本人の伸びや自分を高めよう意識している姿そのものに価値があることを認められる集団づくりが大切です。「できる」「できない」という価値観ではなく、過程や内面の成長に着目し、認め合うことを大切にできる集団であれば完璧でなくても良さを受け入れられるので、個々の困難さは軽減することにつながると考えられます。



「これならできる」「これでもできる」

エピソード

小学校第4学年。朝学習の様子です。

毎週金曜日には習った漢字の小テストを行っているのですが、子供達からはいろいろな声が上がります。

子供:「分かんないよ。どうしよう…無理。」

子供:「僕は、完璧に覚えてるよ。先生、早くテストしよう!!」

担任の先生は、全員が自信をもって小テストに向けて、漢字の練習を繰り返す必要があると思ひ宿題の量を増やしたり、朝の学習で書いて練習する時間を取ったりしました。しかし、漢字の苦手な子供の習得にはつながらないだけではなく漢字練習への意欲が低下している姿も見られました。



子供の学びの支え方を考える

全員が漢字を習得できるように同じ方法で書く量を増やしても、定着しにくい子供もいるな。意欲も低下してしまうのが気になるな。



この状況を改善するために、まず漢字テストに向けての朝学習の時間を工夫していきました。

大切にしたい価値を明確にする

一人一人には「自分に合った学び方や覚え方」があるかもしれない。またそれを認められる学級集団であってほしいな。



大切にしたい価値観について子供と考える

担任の先生は、学級全体に対して次のように伝えました。

担任:「漢字の復習は、三つの勉強方法から選んでください。」

- ①復習漢字プリントで書いて確認コース
 - ②漢字ドリルで読みを確認、空書きコース
 - ③「点、画、はね、はらい」等、丁寧に漢字を書くことを目標にしてドリルを見てノートに書き写す丁寧コース。
- さあ、みんなは、どんな勉強の仕方を選びますか。」



と学級全体に問いかけました。

子供:「漢字を書かずに練習もあり?それならできそう。」「覚えてない漢字だけドリルで確認しよう。」

子供:「私は、大体の形は覚えているので、『はね』『はらい』を意識して丁寧に書こう。」

と「自分に合ったやり方」で一生懸命に自分の学びに向かう子供たちの姿が見られました。

担任:「漢字の復習の仕方もいろいろあるね。どれが良くて、どれが悪いという訳ではなく、「自分のやりやすい方法」を見つけて復習することも勉強を進めていくには大切なんだよね。」

子供:「なるほど。何か漢字の自主学習みたいな感じだね。」

教えて！
教師

多様な学び方をすることが当たり前になるには、その学び方をして「分かった」「できた」という経験が必要です。全員が同じ方法で同じように学ぶ時間も大切ですが、違う方法で学ぶことを「良し」とする指導者の価値観は、多様な学び方に寛容な学級の風土に影響します。みんなと同じ方法で学ぶことが難しい場合でも、集団が多様な学び方に寛容であれば、「自分に合った学び方」で学びやすくなり、個々の困難さを軽減することにつながると考えられます。



「ルールを守ることは大切…でも」

エピソード

小学校第5学年。学年1クラスの学級での出来事です。

学級開きを行い、数日がたった給食の時間。黙々と給食を食べる子供達。

誰一人話をする子供はいません。給食時間終了の5分前から一斉に片付けが始まります。

とてもシステマチックに子供が動いていきます。

給食を食べるのに時間がかかりがちなある子供が、最後に給食の片付けをしていたのですが給食トレイには、ふたを開けて全く食べていないデザートがありました。

担任：「どうしたの？それ嫌いなのか？」

子供：「いいや。好き。でも、時間がきたからやめた。」

担任：「一口くらい食べたらいんじゃない？」

子供：「時間がきたら食べたらいけんから。」

その様子を見ていた他の子供からは、昨年度からのクラスのルールだからその行動は当然であるとの声が上がりました。

最後に片付けをしていたその子供は、デザートの中身を食缶に入れて自分の席に戻りました。担任の先生は、何かすっきりとしない気持ちになり、その理由を考え始めました。

子供の価値基準を理解する

時間やルールを守ることは大切なことですが、あまりにも徹底し過ぎているような気がするな。



そして、前年度の給食のルールを厳格に守ることについて一人一人がどう考えているのかを尋ねてみることにしました。

大切にしたい価値を明確にする

ルールは大切ですが、状況や場面によってしなやかに捉える「学級集団の寛容さ」もあるといいな。



大切にしたい価値観について子供と考える

そして、5時間目にクラス全体で話題にしました。特に片付け開始の時間になった時、まだ食べられる物が残ったらどうしたらいいかについて意見を出し合いました。

「ごちそうさまに間に合わなくなるから今のままでいい。」や「食べられるものなら給食を返却をするまでちょっと時間もあるから食べればいいんじゃない。」など「こうかもしれない。」「この場合はどうかな？」子供達は、色々な立場から意見を出し合いました。

最終的には、片付け開始になっても、もし、自分が食べられるものがあれば、全く食べずに返却するのではなく、食べても良いのではという「状況に応じて」という緩やかな結論に至りました。

その後の給食の返却時間には、「まだ、間に合うから、ちょっと食べてみたら。おいしいよ。」という学級集団の声も上がり、急いでデザートを頬張る子供たちの姿が見られました。

教えて！
教員

ルールは何のためにあるのでしょうか。それは、誰もが安心して過ごしやすいようにするためでしょう。

しかし、全ての事象において厳格にルールを適用したり、指導の根拠とするのはどうでしょうか。確かに「正しいこと」なのですが、生活の中には、その時々状況や人の事情があります。だから、「ルール」と「教師の幅のある裁量」との折り合いをつけながら子供と関わったり、子供に問いかけたりする営みが大切です。そのことで、ルールという一つの視点からだけでなく、事情や状況等の複数の視点から人や物事を捉えることのできる寛容度の高い学級集団につながると考えられます。幅をもってルールを捉える集団の中では、一人一人の困難さを軽減し、過ごしやすいでしょう。



2 多様性を認め合う集団づくり

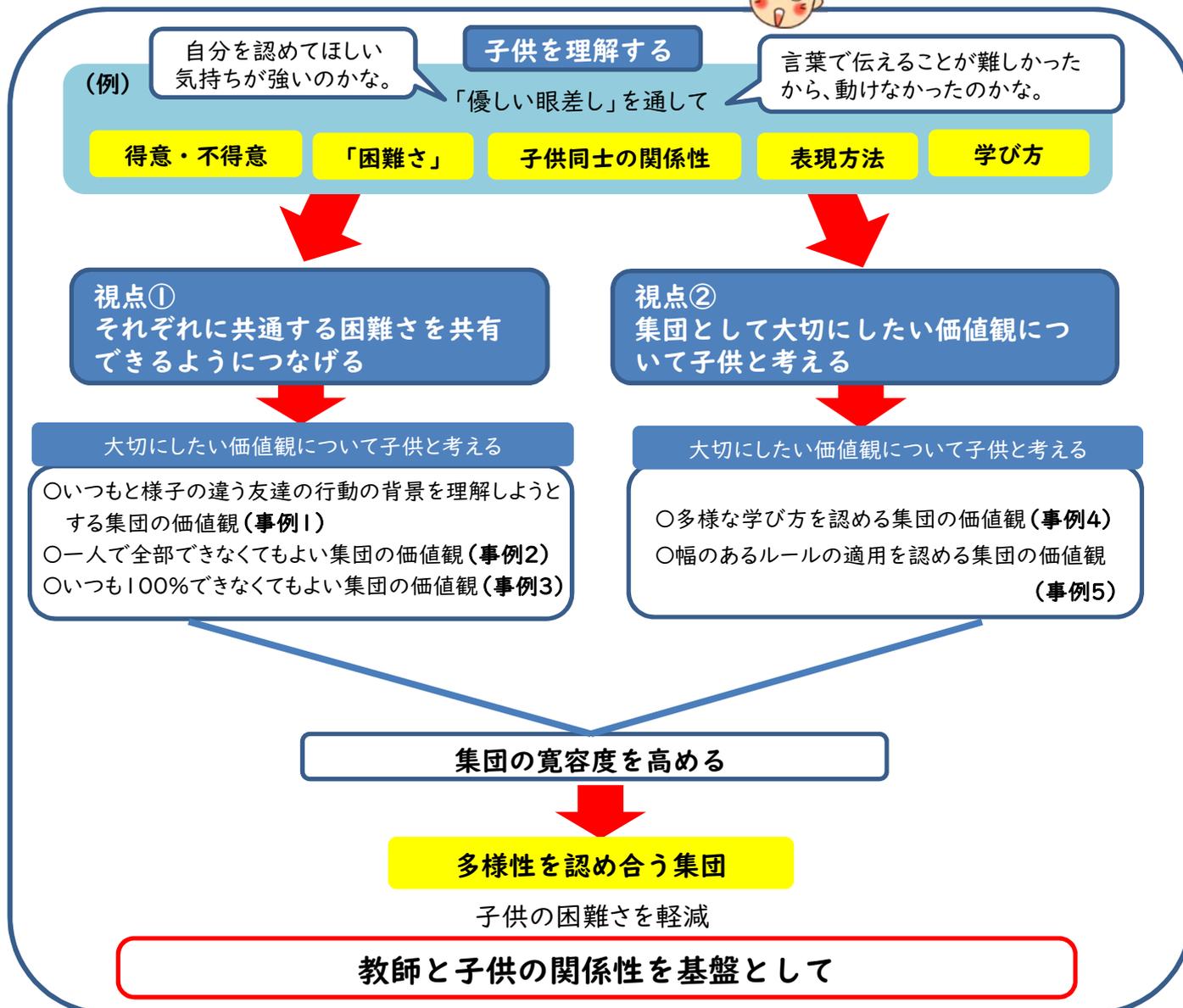


どの事例も担任の先生が、子供を理解しようとしたり、大切にしたい「価値観」について考える場を設定したりしていました。でも、私の学級でも事例のようにうまくいくのでしょうか。

どの事例も、先生と子供の信頼関係づくりが基盤になっています。そのためには、まずは、子供のことを「理解する」ことが大切です。次の図は、「多様性を認め合う集団づくり」と一人一人の子供の困難さの軽減との関連を図に示したものです。



「多様性を認め合う集団」と「困難さ」の軽減



ここでポイント

子供の「困難さ」を理解し、軽減するために個の教育的ニーズに応じた指導・支援を行うことは大切です。ここでいう子供の理解とは、徹底的に背景要因を追求するのではなく、子供を肯定的に優しい眼差しで見つめ、行動の背景を緩やかに考えていくイメージです。さらに教師が、子供を理解した上で、互いの困難さを集団を構成する一人一人が共有し、自分事として考えるように促すことが必要です。個々の「考え方の違い」「受け止め方の違い」「得意なこと・不得意なこと」等を子供同士が理解し、どのように関わることが必要かを教師が集団に問いかけ、一人一人が「考える」ことが必要です。その際、多様性を認め合う集団を支える「大切にしたい価値観」を話題にして考え、納得を積み重ねていくことが、集団の寛容度を高めることにつながり、個々の「困難さ」を軽減していくことができると考えられます。一人一人が認められたり、受け入れられたりする経験を積み重ねることで、互いに受容的・親和的に関わろうとする集団の風土を醸成します。その関わりの基盤となっているのは、教師と子供の関係性です。その上で事例のようにその瞬間、場面の小さな営みを積み重ねることも共生社会の実現につながると考えられるのです。



取組の基盤は教師と子供の良い関係性なのですね。「多様性を認め合う集団」を支える「大切にしたい価値観」を話題にして、学級集団に考える場を設けて、納得する経験を積み重ねていくことが大切であることは分かりました。事例で取り上げたもの以外にも「大切にしたい価値観」はあるのですか？

事例で取り上げた価値観は、大切ですがすべてではありません。その状況によって子供に考えてほしい価値観は、たくさんあると思います。



～多様性を認め合う集団を支える価値観(例)～

例えば・・・

<表現方法の違いを認められる価値観>

○大きな声ではきはきと挨拶や発表ができることも素晴らしいが、黙って軽く会釈をしたり、可能な方法で考えを伝えたりすることができることも素晴らしいと捉える価値観。

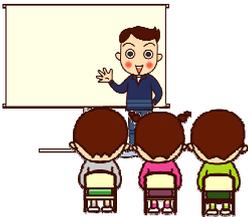
<部分肯定ができる価値観>

○「できる」「できない」「よい」「悪い」という二者択一ではなく、その中間や過程等の部分的な良さを認められる価値観。

<失敗を次に生かす態度を肯定できる価値観>

○「ミスがなく早くできること」も素晴らしいが、「ミスに気が付き、どうして間違ったのかを考え、次の取組に生かすこと」も素晴らしいと捉える価値観

等



今回の事例で取り上げてはいませんが、「多様性を認め合う集団」を教科・領域の学習指導に位置付けて育成することも大切な視点です。例えば、「特別の教科 道徳」や「特別活動」の学級活動でねらいをもって「多様性を認め合う集団」づくりにせまる授業を行うこと等が考えられます。



なるほど。事例のように状況に応じ、その場の教師の判断で「価値観」について子供と考えていくだけでなく、ねらいをもって意図的、計画的に授業を通して取り組むことも大切なのですね。

また今までの特別支援教育で大切にしてきた「個のアプローチ」、つまり個の困難さに応じた指導・支援を合わせて行うことも大切です。



3 Q&Aコーナー



Q 1

「多様性を認める集団づくり」は大切ですが、学級集団に緩みが出てきて、荒れませんか。

A 1

「多様性を認める集団づくり」は、すべてを受け入れ、何でもOKということではありません。教科学習であつたらその授業の目標にたどり着くプロセスとして妥当であるかは教師が判断しないとけません。そのためにはまず、教師が子供の実態を把握し、子供を理解しようとするのが大切です。そして、その子供に合った関わり方、学び方、その子供の事情等について周囲の理解を促すために考える場を設定し、子供同士の理解を深め、学級集団の「納得」を得る営みが重要になってきます。子供が互いに理解し、納得する中で友達を受け入れたり、互いに必要な関わり方を理解したりすることが、ここでいう「多様性を認める集団づくり」ということになります。学級集団の納得をもとに進めていくことがポイントです。



Q 2

生徒指導の視点からの取組と何か違いはあるのですか。

A 2

「やっていること」、つまり実践としては共通していることは多いと思います。これまでの特別支援教育は、子供の困難さに焦点をあててきました。しかし、今回は、社会モデルの障害観から、困難さのある子供が過ごす教室の人的な環境である集団の在り方に視点をおいた取組を重要視しています。そこには、一人一人の居場所のある集団づくり、個を認め合う集団づくり等、これまで生徒指導の視点で語られていたことと重なるところがあると考えられています。これまでは、生徒指導の視点、特別支援教育の視点と分けて捉えられていた面もありますが、多様性を認め合う集団づくりを目指すにあたって「融合」して考えていくことが大切です。





Q 3

黒板周りをすっきりしたり、ホワイトボードで予定を知らせたり等、支援ツールを学校で統一して特別支援教育に取り組んでいますが、これは多様な実態のある子供も含めた支援と考えてもよいのでしょうか？

A 3

例えば、予定をホワイトボードに書いて知らせることは、順序や手順にこだわったり、見通しをもったりことが難しい子どもにとっては、効果的な支援ツールになると考えられます。社会モデルの障害観は、「環境との関係性」から「障害」を捉える考え方であり、「物的な環境」を整備してあらゆる人が学びやすい環境づくりを行っていく取組の一つであるといえます。どの学級も全く同じ物やツールでうまくいくこともあるかもしれませんが、さらに個や集団の実態に応じて、カスタマイズをしていく視点や許容度を意識しながらの取組になると、よりみんなが学びやすい環境づくりにつながっていくと考えることができます。



Q 4

多様性を認め合う学級経営を目指して、「できている」ことを褒めて子供の多様な良さを学級全体に伝えよう考えていますが、あまり子供たちに伝わっていかない感じがしているのですが…。

A 4

子供の良さを褒めることは大切です。しかし、子供の「できた」ことのみを褒めることは、「できなければだめ」という価値観を子どもがもつことにつながるおそれがあります。結果ではなく、ほんの少しの頑張りを見せた時、もっている力を発揮した時、力を伸ばそうとした時、友達への気遣い…等本人が意識していることも、無意識でしていることも価値あることと思うことをタイミングを逃さず褒めると良いでしょう。そして、子供一人一人が自分にOKが出せることが大切です。その基盤には、肯定的な関わりを通して子供にとって指導者が「褒めてもらいたい存在」であるような関係性を構築していくことが求められます。



第3章

通級指導教室

この章の登場人物



通常の学級担任
千太先生
【採用二年目】



通級による指導を受ける
Tさん
小学校2年生



通級指導教室担当
晴国先生

1 通級による指導とは



通常の学級担任
千太先生

共生社会の担い手を育てるには、多様性を認め合うことが大切であることは分かりました。では、Tさんが指導を受けている通級指導教室との関係は、どう考えたらいいのでしょうか？



通級指導教室で指導を受けているTさん

なるほど。ところでTさんが指導を受けている通級指導教室ですが、そこでどのようなことを学んでいるのか知っていますか？



通級指導教室担当
晴国先生



通級指導教室の先生と電話や通級ノートによる情報交換はしていますが…。そこで、どんなことをしているのかは詳しく知りません。

では、千太先生、通級指導教室のTさんを担当している私から説明しますね。



1. 「通級による指導」とは何か

通級による指導とは

小・中学校等で通常の学級に在籍する障害のある児童生徒が、各教科等の大部分の授業を通常の学級で受けながら、一部の授業について該当児童生徒の障害に応じた特別の指導を特別の指導の場で受ける指導形態です。また、指導を行う際には、当該学校の教育課程に加え、又は、その一部に変えて行うものであり、通級による指導を受ける児童生徒については、特別の教育課程を編成する必要があります。



「特別の教育課程」ですか。どのような指導が行われているのですか。

チェック

初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド
文部科学省（P8～）



通級指導教室では、「自立活動」の内容を参考に指導しています。

「自立活動」

個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度、習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。



学習上、生活上の困難さを改善・克服する…。トレーニングをして一人ですること増やすことを目指しているのかな？

チェック

特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」
（P50～）



障害による学習面や生活面における困難の改善・克服に向けた指導が基本ですが、一人で何でもできるようになることを目指しているではありません。



2. 「通級による指導」で大切にしていること

学習上・生活上の困難を改善、克服すること

【自立活動を参考にした指導】

- 【例】
- ・自分の得意・不得意を理解できるようにする。
 - ・「自分に合った」学び方を見付け、人や環境に働きかけることができるようにする。
 - ・肯定的な自己理解を進められるようにする。

心の安らぎ、安心できる場所であること

【信頼関係の構築】

安心感のある環境下で人と関わることのよさを感じられるようにする。

意欲



自信

思いや願いを実現すること

【適切な実態把握】

- ・困難さ、得意なことを含めて子供を理解する。
- ・子供の「思い」や「願い」に寄り添い指導につなげる。

ここでポイント

通級指導教室は、基本的には、障害による困難さを改善・克服する場であるといえます。しかし、それだけではありません。信頼できる人と安心できる環境で学ぶことは「人と関わることの良さ」を感じたり、心が安らぐ時間であったりする場でもあります。また、そのような安心できる場であるからこそ、自分の思いを実現しようとチャレンジする場にもなります。子供にとって通級指導教室で学ぶことそのものに意味があると考えられます。



子供の「思い」や「願い」を大切に指導を進めているのですね。また、自分を肯定的に理解できるような関わりを大切にしているのですね。

自己を理解する

安心感のある人間関係を基盤とした環境下で人と関わる体験を活動を通して自分の得意なこと、苦手なことを理解することが大切です。子供自身が、自分の良さに気づき、自己肯定感を持つことで、肯定的に自己を理解できるようになると考えられます。そのことで初めて自分の苦手さや困難さと向き合うことができます。

支援を依頼する

肯定的な自己理解ができることで、自分の苦手な事や困った状況に向き合うだけでなく、自分の可能な方法で自ら環境（人・物）に働きかけることができるようになることが大切です。その際「支援を依頼する」ことが重要です。また、「支援を依頼したらうまくいった」という成功体験を積み重ねていくことができるような周囲の人の関わりが大変重要です。

チェック

特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」(P9~)



学習指導要領「自立活動編」でも改訂のポイントとして示されています。



2 実践事例

在籍学級でのエピソード



通常の学級では、先生が説明をしている時、Tさんは、「先生、もう分かった。」と言って活動に取りかかろうとしたり、出し抜けに発言しようとしてしたりして、担任から注意を受けることがあります。また、早合点することで間違ったり、捉え違いをしたりすることがあります。

そして、自分のやり方にこだわり、先生や友達から「こうしたらいいよ。」という声をかけられても「これでえんじゃ。」と言って変更することが難しいこともあります。

友達と遊ぶことが大好きなのですが、遊びのルールを捉え違えて、そのことを友達から指摘されると黙り込んでしまうことがあります。



通常の学級担任
千太先生

在籍学級でのTさんは、落ち着きのなさが気になっています。Tさんとどう関わっていけばいいのか悩んでいます。通級指導教室では、どんなことをしているのでしょうか？

通級指導教室では、Tさんの学習上、生活上の困難の改善・克服する視点から指導や関わり方を考えています。そのためには、まず在籍学級と通級指導教室での様子から実態把握をしていくことが大切です。



通級指導教室担当
晴国先生

【Tさんの実態】

- ・自分の気持ちを言葉で表現することが難しい。
- ・自分のやり方を変えられず、失敗することが多い。
- ・話の途中で分かったつもりで活動を始めることがある。
- ・発音が不明瞭で相手に伝わらないことがある。
- ・友達と一緒に遊ぶことが大好きである。

等



通級指導教室で指導を受けているTさん



通常の学級の実践でも大切にされていた視点ですね。通級指導教室の先生からの情報は、関わり方のヒントになりそうだな。

なぜ、そうせざるを得ないかという視点から背景要因を見立て、Tさんに応じた関わり方について考えています。



背景要因は何かを考える

- ・言語で表現することが苦手なのは、場面に応じて何を言えばよいのか知らないのかもしれないな。
- ・また、発音が不明瞭でうまく相手に伝わらないので表現しようとしていないのかもしれない。
- ・自分のやり方にこだわるのは、「～すべき」という考え方が強過ぎるのかもしれないな。
- ・衝動性が高く、すぐに行動してしまいがちなのかもしれない。

通級指導教室

個へのアプローチ

通級指導教室では、背景要因から、個別の指導計画を立て、個に応じた関わり方を考えて指導しています。



困難さに応じた指導・支援を考える

～「これ」が改善されると過ごしやすくなるという視点から考える～

- ◎人の話を最後まで聞くと、うまくいく、「できる」ということを感じられたらいいな。
- ◎言語を使ってやりとりできるとたくさんの友達ともっとうまく関われるのにな。そのためには発音の習得も必要な。

【長期目標】

- ・話を最後まで聞いて、落ち着いて活動することができる。
- ・正しい発音を習得し、人とのやりとりを円滑に行うことができる。



興味・関心を学びにつなげる



Tさんは恐竜の名前をたくさん知ってるね。さらに恐竜について自分で調べ、勉強しようとしているところは、Tさんのとってもいいところですよ。

「サ行」の発音が苦手なTさんは恐竜が大好きです。恐竜の名前にはたくさんサ行が使われています。恐竜について自ら調べ、学びを広げようとする態度をTさんの良さとして肯定的に受け止め、Tさんの課題である発音の練習に前向きに取り組めるようにしました。

衝動を制御しようとする内面を読み取り 言語化して即時評価する



最後まで聞いたら、「できた」「分かった」という積み重ねも大切です。

3ヒントクイズでは三つのヒントを全て聞いてからカードを選んで答えを言うルールで活動を行いました。ヒントを二つ聞いた時にカードを選ぼうとする気持ちはありましたが、最後までヒントを聞き正解のカードを選びました。正解したことだけでなく、気持ちを抑えて最後まで聞いて活動できたことに視点を当て「すぐに取りたい気持ちをよく抑えたね。先生にはよく伝わったよ。よく我慢できたところがTさんの素敵などころだよ。」とTさんの心の葛藤を言語化して価値付けました。

「尋ねる」「頼る」学び方について一緒に考える



「頼る」「尋ねる」も大切な勉強方法ですよ。

質問されている内容がよく分からなくても考えずに発言したり、答えたりして失敗することが多かったTさん。カードを使って「こんな時どうする」のかを考えたり、他の指導場面で分からなかった時は、「尋ねる」「頼る」方法を一緒に考えたりしています。聞く活動の際、「もう1回言ってください。」と伝えることで、正しく聞き取り、クイズに正解することができました。「尋ねて分かる」「頼ってできる」も大切な勉強のやり方の一つであることを伝えていきます。

通級指導教室では、通常の学級で力を発揮することができることのみを大切にしているのではなく、その時間に「人と関わるよさ」「学ぶ喜び」等、人としての豊かさを広げることも大切にしています。また肯定的に自己を理解することを通して自信を深めたり、意欲を高めたりして一人一人の状況や願いを大切にされた指導が行われています。

教えて！
教授



通常の学級担任
千太先生

通級指導教室では、関わりの中で自分自身の良さを理解したり、人に頼ったりすることができるようにしていることが分かりました。

まずは、安心した状況下で、肯定的に自己を理解し、「自分自身を信頼する」ことができるようになってほしいと考えています。



通級指導教室担当
晴国先生

実践から、まずは、子供と先生との安心感のある関係性が大切であると思いました。私も在籍学級でTさんに関わる上で通級指導教室の様子も含めもっと理解することが大切だと思いました。そのためには、通級指導教室の担当者との「連携」が必要だと思います。



通常の学級担任
千太先生

在籍学級での連携

個へのアプローチ

個に応じた関わり方を考える

連携から関わり方を考える

通級指導教室で、「興味・関心を学びにつなげる」ことを大切にしていたなあ…



Tさんは恐竜の名前をたくさん知ってるようだね。



興味・関心のあることをつなげる

通級で頑張っていることを担任の先生は、知ってくれているんだな。



- ・興味・関心のあることを話題にした雑談をすることで教師や子供同士がつながることができるかもしれない。
- ・Tさんの得意な恐竜クイズを学級で披露できる機会を設定してみようかな。
- ・文字を読んだり書いたりする際、興味・関心のあるものを題材に教材化して取り組みやすくていいかもしれない。

子供のよさを見付け、広げる

連携から関わり方を考える

通級指導教室と同様に「肯定的に自分を理解できる」ようにすることも大切だと思います…



頑張りカード



在籍学級での頑張りを通級の先生にも伝えたいな。



- ・「話を最後まで聞いて活動する」ことを頑張っているので在籍学級でも、「最後まで聞く」ことを前もって伝えて、できたらすぐに褒めるといいかな。
- ・Tさんだけでなく子供達一人一人の良さや頑張りを帰りの会でのいいこと発表や連絡帳に「先生メッセージ」としてたくさん伝えていくこともできるかな。
- ・頑張りカードを作って、通級の先生にも在籍学級での頑張りを伝えて褒めてもらえるとう級でも在籍学級でも励みにならないかな。

集団へのアプローチ

学級全体の子供の支援につなげる

連携から関わり方を考える

通級指導教室では、「尋ねる」「頼む」等、学びを支える方法を大切にしていました。学級全体の支援につながるかもしれないな。



学び方は、様々あって良いという前提で、子供と関わろう

学びを支える方法に幅をもたせる



- ・一人で全部できることを「よし」とするのではなく、「教えてもらってできる」「手伝ってもらってできる」「複数で取り組む」等の場を意図的に設定し、いろいろな学び方であっても良いという価値観が当たり前の学級集団にしていきたいな。
- ・全員に対して、分からない時、難しい時は、「助けを求める」「友達に聞く」方法でやっても良いという見通しがもてるような指示を出すといいかなあ。そのためには、関係性を考慮した席の配置をしたり、具体的な援助要求の仕方を全員に確認したりしておくことが必要かもしれない。
- ・日頃から「自分さえ良ければいい」という考え方ではなく、「人の役に立つ」喜びを体験できる活動や価値付けが必要だろうなあ。



通級指導教室の担当者と「連携」したことを在籍学級で、「個のアプローチ」だけでなく「集団へのアプローチ」の視点からも、具体的な指導や支援につなげていこうと考えているのがいいですね。



「自分に合ったやり方」見付けたよ ～小さなエピソード集～

通級指導教室では、子供の「思い」や「願い」に寄り添いながら、肯定的な自己の理解を支えることができるように子供と関わっています。このページでは、そのような関わりの中で、「自分に合った学び方」や「自分に合ったやり方」を見付け、自信や意欲を少しずつ高めている子供の姿を紹介します。



「できそうな気がしてくるんよ。」

文字を読むことが難しい児童。読み上げると、意味が分かり、答えられる力があります。在籍学級の担任の先生は、ルビ付きテストを活用しています。通級による指導で…

C:「先生、読み仮名があるから、僕できるんよ。」

C:「できそうな気がしてくるんよ。」

でも、読むことに時間がかかることもあります。全部読むことができなくても児童は、笑顔で活動に取り組む姿があります。



「先生、読みやすくなったよ。」

文字の読み書きが苦手な児童。ひらがなの特殊音節の読み書きの定着を図っていた時のこと。

T:「『すきっぷ』の『つ』は詰まっていますの印だから読まないんだよ。」

C:「そうなの？ 小さい『つ』があるから私は小さい声で読んでたよ。」

C:「でも…先生、小さい『つ』は読まない方が読みやすいね。先生『すきっぷ』してみようよ？」

T:「よ～しっ、一緒にやってみようか。」

言葉を動作化して学ぶ姿が見られました。

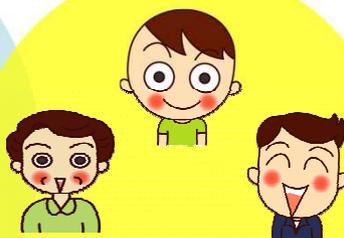
C:「先生、手伝って。」

T:「よく言えたね。」



T:「鉛筆を持つ方で投げるとうまくいったね。」

「これでいい」「これなら大丈夫」



T:「負けても文句を誰も言わなかったね。」

C:「今日は悔しいけど、楽しかった。」

「『心の中の言葉』を知って何か落ち着いたわ。」

学校の近くには行くことができるが、校門に入るまでに時間がかかる児童。教室に入りにくい時もあります。

SSTカルタを通級指導教室で取り組みました。

T:「声にはしないけれど、心の中で言う言葉があり、『内言』というんだよ。」

C:「『心の中で言う言葉』かぁ。心の中で自分の気持ちをつぶやくかぁ。」

ある日の通級でのこと…。

C:「最近、心の中で自分の気持ちをつぶやくことがあるんよ。何か分からんけれど、落ち着くことがあるんよ。」

T:「そうかぁ。落ち着く方法を自分で見付けたようだね。」

自分に合ったやり方を見付け「これなら大丈夫」と思えた瞬間に出会えました。

「読めなかったのだけ、もう1回」

読むことが難しい文字に読み仮名を書くと同時に、その字を単語カードに書いて読む練習をしています。

C:「読めなかったからもう1回。」

と言って文字の練習を繰り返し練習する姿が見られました。

T:「いつも頑張るね。でも、ほとんど読めるようになったから、読めなかったところだけ練習するのはどうかな？」

C:「それでもいいん？じゃ、試してみる。」

C:「読めなかったのだけもう1回。」

(実際にやってみた後に)

T:「先生、これええなぁ。」

指導者が「やり方」を提案する時も、児童自身の納得が大切です。



3 「連携」を在籍学級全体の指導につなげる



通常の学級担任
千太先生

通級指導教室では自分のよさや自分にあったやり方を担当の先生との関わりの中で一緒に見付けて、自信や意欲を少しずつ高めている事が分かりました。通級指導教室の様子を含めてTさんのことをもっと理解することが必要だと思いました。「連携」が大切ということは、言葉では理解していましたが、なぜ、大切なのが分かりました。

良いところに気が付きましたね。通級指導教室でも教師と子供との関係性が指導の基盤です。その視点からもお互いに子供を深く理解しようすることが本当に大切です。さらに、在籍学級全体の子供の支援につなげる視点も重要です。



通級指導教室担当
晴国先生

「連携」を在籍学級全体の指導につなげる



- ・通常の学級でも一人一人の「思い」や「願い」を大切に、互いに「認め合い」「支え合い」が実現できるような関わり方につなげていく
- ・通級指導教室で大切にされている「肯定的な自己理解を支える」「支援を依頼する」等の関わりをヒントに 学級全体の子供の支援につなげていく

在籍学級では、通級指導教室と同じことはできません。しかし、子供の「思い」を大切にしたり、肯定的な自己の理解を支えたりする等、通級指導教室で大切にしていることを在籍学級の実態に応じてカスタマイズして指導、支援につなげる視点が大切です。



コラム

①

～「人に迷惑をかけるな」という価値観～

「人に迷惑をかけてはいけません」これは、日本の社会では、当たり前のように大切にされてきた価値観ではないでしょうか。このことは、現在も色濃く残っている傾向があり、学校教育だけでなく「地域」「家庭」にも影響している部分があります。そのこと自体は、間違っていることではないと考えられますが、捉え方によっては「人を頼ることは、良くないことである」「自分一人でやらないことは、いけないことである」という誤解につながります。大人の社会でも、誰もが人を頼りながら生活をしています。職場で分からないことがあれば、得意な人に尋ねたり、「ちょっと手伝って」と協力してもらったりして生活をしていないでしょうか。そう考えてみると人に支援や依頼をすることは当然のことであり、生活を営む上では、とても重要なスキルであるように思います。

「学校」「家庭」「地域」で「人を頼ること」や「人に支援を要求するスキルを身に付けること」はどれだけ大切だと考えられているのでしょうか。今一度、考えていくことが求められているのかもしれない。

「連続性のある多様な学びの場」

教育的ニーズに応える指導を
提供できる多様で柔軟な仕組みの整備



通常の学級

通級指導教室

特別支援学級

特別支援学校

～連続性のある多様な学びの場～

多様な子供の実態に応じるため、通常の学級、通級指導教室、特別支援学級、特別支援学校での指導の充実を図るだけでなく、それぞれの学びの場は連続していると考えられ、その時の実態に応じて学びの場を選択したり、変えたりできます。

コラム ②

～新たな学びの場「特別支援教室」の取組～

「可能な限り共に学ぶ」ことを追求するために一人一人の教育的ニーズに的確に応えることのできる多様で柔軟な学びの場として岡山県では「特別支援教室」の取組を行い、実践を深めました。

「特別支援教室」では、通常の学級での学習だけでは十分に力を発揮することが困難な児童生徒を対象に、個別に取り出し指導を行っています。この取組では、子供が特性に合わせた学び方を身に付け、授業の内容を理解し、学習に参加している実感、満足感を持って学習に取り組むことで、生きる力を身に付けることを目指しています。

<指導の実際>

- 先行学習（予習）を大切に学習
【例】週2時間程度、同一教科で実施
（授業時間数、他の教科との関連等を考えると国語又は算数がより適切）
- 障害特性に応じた学習を大切に指導

通常の学級



授業改善
全員が
「わかる・できる」

特別支援教室



実態に応じた指導をもとに「国語」「算数」等の取り出し指導



「特別支援教室」の取組を充実させていくには、担当者と通常の学級担任との連携を行い、児童生徒についての共通理解を図ることは不可欠です。しかし、打ち合わせの時間が取りにくいことも考えられます。そこで、担任が児童生徒の様子を伝えることができるように日々の記録や、教室環境の整備などを工夫して、連携を図ることも大切です。また、記録等は、個別の教育支援計画等に記入し、活用していくことも大切です。

チェック

岡山県教育庁特別支援教育課「特別支援教室ガイドブック～多様な学びの場の充実のために～」



4 Q&Aコーナー



Q 1

「自己を理解する」「周囲の人へ支援を依頼する」ことは大切であることは分かりましたが、その他の内容はあまり取り扱わないのですか。

A 1

子供の教育的ニーズは個々によって違います。中心的な課題に基づきながら指導内容を考えていくことは大前提です。すでに、「困難な状況を把握すること」や学びやすい環境に変更、調整するために「自ら環境に働きかけること」に関して学んでいる子供もいると思います。今回、大切にしたいのは、現在個々の課題に応じた指導内容に「自己を理解する」や「周囲の人へ支援を依頼する」を子供の姿を意識し、今の指導に無理なくプラスしていくことです。



Q 2

通級指導教室の担当者との「連携」は、大切であるというのは分かりますが、何を共通理解して、どのようにその情報を在籍学級で活かせばよいのでしょうか？

A 2

共通理解しておきたいことは、例えば、該当の子供の困難さや苦手さ、得意なこと、個別の指導計画の目標、通級での指導内容やねらい、困難さへの支援や配慮していること等たくさんあると思います。ただ大切なのは、共通理解した情報を生かして、本人の持っている力を十分に発揮できるようにしていくことです。得意なことを発揮する場を意図的に作ったり、通級で学んだことを生かせるような関わり方や声掛けをしたりするなど学ぶチャンスを広げていく意識は必要でしょう。個別の関わりの中で行う視点と、学級全体の指導の中で行う視点をもち該当の子供の過ごしやすさを考えていくことが大切でしょう。



第4章

交流及び共同学習

この章の登場人物



通常の学級担任
千太先生
【採用二年目】



自閉症・情緒障害
特別支援学級在籍
Jさん
小学校2年生



特別支援学級担任
吉備先生
特別支援学級担任一年目

1 交流及び共同学習とは



通常の学級担任
千太先生

通級指導教室のことは、よく分かってきました。「交流及び共同学習」で自閉症・情緒障害特別支援学級のJさんと一緒に学習する時間があるのですが、どう指導すればよいのか、また、どう関わって良いのか分からないのですが…。



なるほど。千太先生、ところで交流及び共同学習はそもそものような意義や目的があるのか知っていますか？



「交流及び共同学習」の意義やねらい

「交流及び共同学習」とは、障害がある子供と障害がない子供が共に学ぶ場であり、障害の有無に関わらず全ての子供にとって経験を広め、社会性を養い、豊かな人間性を育てる上で大きな意義がある。また、多様性を尊重する心を育むことができる。



障害のない子供たちにとって

障害のある人に自然に言葉をかけて手助けをしたり、積極的に支援を行ったりする行動や、人々の多様な在り方を理解し、障害のある人と共に支え合う意識の醸成につながる。

障害のある子供たちにとって

様々な人々と共に助け合って生きていく力となり、積極的な社会参加につながる。

特別支援学級在籍
Jさん



交流学習のねらい

相互のふれ合いを通じて豊かな人間性を育むこと

共同学習のねらい

共に学びながら教科等のねらいの達成をすること



今まで「共同学習」という側面があることをあまり意識できていなかったなあ…。「交流学習」についてもうまくできていたのだろうか…。

一人一人の教科の学びになっているかどうかは、大切な視点ですね。



今までは…

ただ一緒にいる場を作り、子供たちの自然な関わりに委ねている状態だったな。それでは、いけなかったなあ…。



特別支援学級の担任の先生や支援員の先生に任せっきりの部分があったな。Jさんの実態やねらい等自分もしっかり理解しておかないといけなかったな。



特別支援学級担任
吉備先生

私も交流及び共同学習を進めていく上で、千太先生とあまり話ができていなかった気がします。

先生方、連携の大切さに気付かれていますね。交流及び共同学習を充実したものにするためにも、もう少し考えてみましょう。

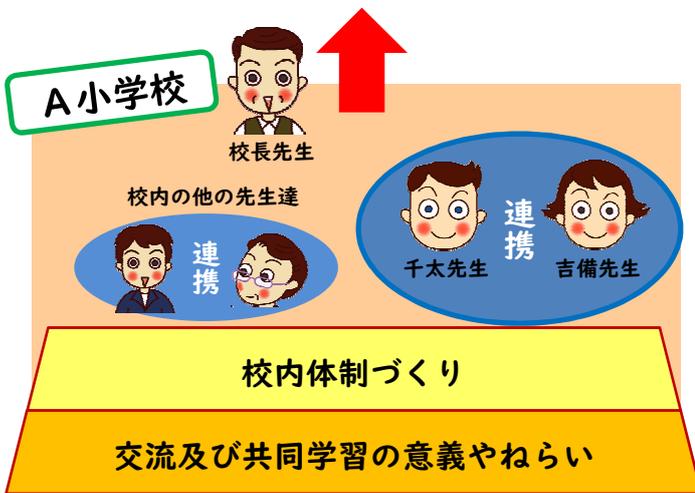


2 確かな学びにするために

教職員によって交流及び共同学習の理解や取組状況が異なると、活動が一過性のものとなる可能性があります。確かな学習にするためにも、校長のリーダーシップの下、学校全体で計画的・組織的に取り組むことが大切です。



交流及び共同学習の充実



計画的・組織的とは？

まずは、交流及び共同学習の意義やねらい、内容等を学校全体で共有し、方向性を揃えて組織的に取り組むための土台作りが重要です。

そして、連携して取り組むための校内体制づくりをする必要があります。例えば、下記のようなことを学校全体で決めたり整えたりしておくこと、交流及び共同学習に取り組みやすくなるでしょう。

- 交流及び共同学習を考慮した時間割編成、特別教室の使用割り
 - 交流のルール
 - ・急な変更をなくす
 - ・教員間の連絡会の定例化
 - ・連絡方法のシステム化
 - ・変更等連絡の徹底
- 等

また、ねらいを明確にし、教育課程に位置付ける、年間指導計画を作成する等、計画的に継続して取り組むことが重要です。



なるほど。
その上で、担当者同士が連携して取り組んでいく必要があるのですね。
でも、どのように連携をしていけば良いのでしょうか。

文部科学省が出している「交流及び共同学習ガイド」には交流及び共同学習の展開やいくつかの事例が載っています。参考にしてみるといいかもしれませんね。



「交流及び共同学習ガイド」
文部科学省



教授に教えていただいたこと、「交流及び共同学習ガイド」を参考に、吉備先生と連携しながら取り組んでみようと思います。

3 実践事例 小学2年 図画工作科

年度初め

<通常の学級>

- ・男女で仲良く遊ぶことができる。
- ・人の手伝いを好んで行う。
- ・反面、自分のことで精一杯で他者に関心のない子供もいる。



<特別支援学級>

Jさん



- ・見通しがないと活動が停滞する。
- ・衝動的に動こうとする。・体を動かすことを好む。
- ・特別支援学級担任には困ったら「先生来てください。」と言える。

ここで連携!

- ・特別支援学級の児童の得意、不得意や人と関わる力について共通理解。
- ・特別支援学級で担任が特に本人と関わる際に重視しているポイントを共有。
- ・計画については、放課後や学年会の際に口頭のやり取りや略案や週案を基にして担任同士で確認。

◆周囲に個の理解を促す

- 年度当初に特別支援学級とはどんな場所かを特別支援学級の先生から話をした。
- 保護者と合意形成を行い、誰もが得意・不得意があることを前提にして、特別支援学級在籍の児童の得意・不得意について伝えた。
- 「一緒にする?」と尋ね、本人が求めてきた時にはサポートしてほしいこと、本人がやろうとすることやできることは本人にまかせてほしいなどの関わり方を伝えた。



- 日頃から困った時にはどうするのかを特別支援学級で担任と確認している。また、日頃の授業で伝え方について実践的に学んでいる。



気持ちを落ち着けるためにクールダウンに行きたいというカード

ここで連携!

実施する前の週末までに

- ・事前に取り組む教材や図工で何を素材にどんなテーマで製作をするのかを確認。
- ・粘土の扱いの実態やその他の道具、トッピングに使う材料などを確認。
- ・製作した後、鑑賞も兼ねて「お店屋さん」を模して子供同士の関わりをもたせる計画を知らせ、特別支援学級の児童のねらいについて共通確認。

学習前

◆ねらいを明確にする

(交流のねらい)

特別支援学級の児童と共に活動することを通して様々な得意・不得意のある他者を理解することができる。

(共同学習のねらい)

粘土を使った造形的な面白さや表したいこと、表し方などについて考え、楽しく発想や構想したり、身の回りの作品などから自分の見方・感じ方を広げることができる。

(Jさんの交流のねらい)

集団の中でも人と関わる力を発揮し、友達と活動できる。

(Jさんの共同学習のねらい)

粘土を使った造形的な面白さや表したいこと、表し方について自分なりに発想や構想したり、仲の良い友達との関わりや友達の作品から自分の見方・感じ方を広げることができる。

※目標を下げているわけではなく、子供の実態に合わせて設定しています。

◆参加の仕方を調整する

- 事前に授業日の朝、教科書やその日に使う教材等を出して、どんなことをするのか、何ができそうかの確認をした。
- 今日は「粘土」だから、どんな事ができそうか、事前にJさんと話し合った。



【主な学習の流れ】

1 学習の見通しをもち本時のめあてを確認する

(めあて)
ごちそうをつくってパーティーをしよう

【特別支援学級担任】
今日「お寿司を作りたい」と言ってたよね。



2 粘土でお気に入りの「ごちそう」を作る。

【通常の学級担任】
おいしそうなお寿司を作っているんだね。



3 お店屋さんになって自分の作った料理を友達に話をする。

すごい。お寿司上手だね。お寿司く～ださい。



いいよ。お寿司高いよ。30万円です。

4 友達の作品のよさを発表する。

Jさんのお寿司がとておいしそうでした。



【通常の学級担任】
友達の良さを見付けられてすごいね!

ここで連携！がいきた！

事前に両担任が話をしていたので、活動に見通しをもって参加していました。



吉備先生

千太先生



特別支援学級担任と連携していたので、学習中にどんなサポートが必要かや「粘土でお寿司を作りたい」というJさんの活動に対する思いを理解して関わることができました。

友達と交流する場面では参加しづらいと思ったので、通常の先生には、きっかけを作るお願いをしています。



自分から声を掛けることが難しいことを知っているので、「Jさん、すごく美味しそうなお寿司ができてよ。」とみんなに聞こえるように言いました。すると、友達がやってきて、やり取りが始まりました。



事前の連携があったので、教師が子供達に働きかけ、子供同士の関わり合いを生みました。そして、友達や作品の良さを見付ける子供達の姿につながったのです。



【交流のねらいが達成できたか】

学習後



<Jさんの交流について>

お店屋さんの場面で友達がどのように関わるのかよく見ていて、自分がお店屋さんになる時に参考にする姿が見られました。実際にする前に見本を見るのが良かったのですね。

<通常の学級の交流について>

きっかけがあればJさんと自然に関わることができていました。こういう場を何度も経験することで、きっかけがなくても自分から自然に関われるようになって欲しいですね。

<Jさんの交流について>

友達と関わるきっかけを教師が作れば、やり取りする力を発揮できました。良い関わりができる場面設定を担当の先生と次時も考えることが大切ですね。



【共同学習のねらいが達成できたか】



Jさんのイクラの作品を見て「小さい丸をたくさん重ねていて本物みたい」と発言している通常の学級の子供が何人かいました。それは、Jさんの作品を鑑賞したことで自分の見方・感じ方を広げていた姿だと思います。

仲の良い友達が、ハンバーグの焼き目を串で線を書いて表現している様子を見て、「ぼくもエビに模様をつける。」と言って串で模様を付けていました。友達の作品から模様を付ける良さを感じたのだと思います。



「Jさんにとってこの時間がどうだったのか」についてはもちろん、通常の学級の子供たちにとっても、Jさんと学ぶことで交流のねらいにどの程度到達したのか振り返り、次時へつなげる話し合いができるといいですね。

4 交流及び共同学習と学級経営

子供たちの変容から

全校集会で縦割り班遊びをすることになったある日のこと。何をすればいいか分からなくて動けなくなってしまったJさんに、同じクラスのMさんが「どうしたの？困ってる？」と声をかける姿が見られました。Jさんがこくりとうなずいたので、Mさんは遊びについて説明をし始めました。すると、同じクラスのHさんもやってきて、Mさんと一緒になって説明をした後「一緒にやってみようよ。」とJさんの手をつないで遊びの輪に入ってきました。そのおかげで、Jさんは遊びに参加することができたのです。

それを見ていた千太先生は、MさんやHさんの成長した姿を嬉しく思うと同時に「MさんやHさんのような関わりができる学級であれば、Jさんもより学習や生活がしやすくなるのではないかな…。日頃からそういう学級経営をしておくことが大事なのだろうか。」と思いました。

「交流及び共同学習」が機能するために

<交流及び共同学習が機能する集団>



ここでポイント

交流及び共同学習をより充実したものとするためには、学習を行う通常の学級の在り方が大変重要です。千太先生が気付いたように、学習を行う通常の学級が受容的・親和的な関わりの出来る学級であれば、特別支援学級在籍の子供も通常の学級の子供達も生活や学習がしやすくなるでしょう。そのような学級をつくるためには、第2章に示したような「多様性を認め合う集団づくり」が大切です。まずは、一人一人をしっかり理解して、個に応じた関わり方を考える、そして、集団にも困難さを共有する。それは、特別支援学級在籍の子供と一緒に学習や生活をしている時も同じです。そのようなことを積み重ねながら、互いに認め合う集団を育てていくことで、学級の基盤づくりをしていきましょう。



「多様性を認め合う」通常の学級の雰囲気を作っておくことが大切なのです。さらに、交流及び共同学習を行うことで、多様性を認め合う集団が高まるチャンスになりそうです。

5 Q&Aコーナー



通常の学級担任
千太先生

Q 1
交流及び共同学習の評価はどのように行うのですか。

A 1
交流及び共同学習の評価を行うに当たっては、
★活動を通して、相互理解がどのように進んだか
★各教科・領域等の学習において、どのような力が身についたかの両面を評価していきます。そのためにも、ねらいを明確にしておくことが大切です。そのねらいに応じて活動を具体的に評価し、各教科・領域等の学習においてどのような力が身についたかを明らかにします。
交流のねらいに対する評価については、学習の活動場面での変容だけでなく、その後の学校生活や学校外の生活において、子供がどのような姿を見せているのか、子供の意識や行動にどのような変容や成長があったかなどについても捉えることが大切です。



Q 2
自閉症・情緒障害の特別支援学級の共同学習のねらいは、知的障害がないことを考えると当該学年の通常の学級のねらいと同じと考えられる良いのですか。

A 2
自閉症・情緒学級の特別支援学級は、原則として該当学年の教育課程の編成を基準とします。ただし、子供の実態に応じて、各教科の内容を下学年の目標及び内容に変えることも出来ます。しかし、一緒に交流及び共同学習をする通常の学級は該当学年の学習をするので、内容を変えるのは実際には難しいですね。同じ内容で子供の実態に合った目標を設定すると良いでしょう。



Q 3
交流及び共同学習を行う教科は、どのようにして決めるのですか。

A 3
教育課程を編成する際に、子供の実態を踏まえて交流及び共同学習で参加ができそうな教科の選定を行います。もし昨年度に交流及び共同学習に取り組んでいたなら、昨年度の成果や課題を参考に考えることが出来るでしょう。また、第4章「2 確かな学びにするために」に示したように、交流及び共同学習は学校で組織的に行っていくものです。学校全体の方向性と合わせて考えていく必要もあるでしょう。



特別支援学級担任
吉備先生

Q 4
交流及び共同学習は、特定の教科を決めて取り組むものなのでしょうか。教科の学習への参加が難しい子供もいるのですが、どうすればよいのでしょうか。

A 4
交流及び共同学習には、多様な方法があります。
★給食、係活動、清掃等を交流学級や特別支援学級で共に活動
★特定の教科・領域を交流学級と共に学習
★学年や交流学級の行事に学年・学級の一人として参加
★興味・関心のもてる特定の単元や題材を選んで共に学習 等
できるところから始め、徐々に活動の幅を広げていきましょう。



共生社会の形成に向けて

～「子供を理解する」「つなげる」～

子供を理解することから



私も子供理解は大切にしてきましたが、まだまだ足りないところがありました。また、私自身、学級集団に一人一人の子供の理解ができるように教師が教え諭して子供をつなげようとしていたことに気が付きました。「子供同士が互いを理解しないとイケない」という自分自身の価値観を言葉でダイレクトに伝えようとこだわっていたなと感じました。

子供を理解するには、教師自身が幅をもって子供を見つめたり、関わったりする多様な捉え方も大切です。さらに、教師が教え諭して子供の理解を促すというよりは、一人一人の困難さ、価値観、物の捉え方について「みんなはどうか?」「似たようなことはあるか?」等、共有することで、自分事として考える体験、実感の積み重ねが大切です。「似ている経験がある」「その状況なら気持ちは分かる」など状況、経験などを子供同士が慮ることで、子供同士がやんわりとつながることが、子供同士の理解となるのではないのでしょうか。



すべての子供たちがつながるために…

「共生社会の形成を目指して」



そのためには、私たち指導者も自分の価値観、指導方法にいつも100%こだわるのではなく、子供の実態、状況によって多様な関わり方、つまり指導者としての幅を広げていくための意識が必要です。教授、今から私も頑張ります!!



すべての人の「思い」や「願い」を大切にする

多様性を認め合う集団づくり、つまり一人一人の違いを認め合えることを目指すことは、「困難さ」のある子供のためだけに行うのではなく、全ての人が過ごしやすくなることにつながると考えられます。「思い」や「願い」は違ってもみんな「かなえない気持ち」があるのは同じです。一人一人の「思い」や「願い」を大切にされること…本当に素敵なことですね。



おわりに

これからは、共生社会の形成に向けて「社会」がどれだけあらゆる人のことを想定し、環境を整えていくかが大切になってきます。

学校教育においても、「学校」がどれだけ多様な子供がいることを前提に教育を進めていくことができるか、「学級集団」がどれだけ一人一人の「思い」や「願い」を理解し、大切にしていけるかが求められています。今後、共生社会を担っていく子供達が学ぶ「学校」だからこそ、大切にしたい考えです。

今回、本研究を進めていく中で、このような多様性を認め合う集団づくりを行うに当たり、教師が、子供をより深く理解することや子供と温かい関係を築くこと、また、多様性を認め合うために大切な価値観を子供達と共有することが重要であることを強く感じました。そして、子供達同士がお互いを認め、受け入れる集団となるようしっかりとつないでいくことも大切な教師の役割です。これらは、日々の教師と子供との営みを丁寧に積み重ねてこそ実現していくものだと思います。また教師間でも、日常的にどんな価値観や関わり方を大切にしていこうかを話題に意見交換することも「共生社会の担い手」の育成につながっていくのではないのでしょうか。

本ブックレットを一人一人の「思い」や「願い」の実現を目指し、一人一人が大切にされる学級集団を支える先生方にご活用いただき、子供達の指導にいかしていただくと幸いです。

引用．参考文献

○引用文献

文部科学省(2018)「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)

○参考文献

文部科学省(2012)「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進
(報告)

青山新吾(2016) 『インクルーシブ教育ってどんな教育?』

加藤康紀(2015) 『はじめての通級 これからの通級』

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2018) 『小学校・中学校通常の学級の先生のための手引き書
通級による指導を通常の学級での指導に生かす』

岡山県教育庁特別支援教育課(2016) 『特別支援教室ガイドブック～多様な学びの場の充実のために～』

岡山県総合教育センター(2019) 『特別支援学級担任のためのハンドブック 改訂版』

岡山県総合教育センター(2015) 『自立活動ハンドブックー知的障害のある児童生徒の指導のためにー』

岡山県総合教育センター(2015) 『自分らしくかがやく～発達障害のある高校生のための指導・支援』

笹森洋樹・大城政之(2014) 『Q&Aと先読みカレンダーで早わかり!通級指導教室運営ガイド』

田中博司(2015) 『特別支援教育ONEテーマブック⑨ 通常学級子どもと子どもがつながる教室』

河村茂雄(2018) 『主体的な学びを促すインクルーシブ型学級集団づくり』

青山新吾・岩瀬直樹(2019) 『インクルーシブ教育を通常の学級で実践するってどういうこと』

青山新吾(2015) 『THE特別支援教育～特別支援学校・特別支援学級～』

文部科学省(2019) 『交流及び共同学習ガイド』

文部科学省(2020) 『初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド』

川上康則(2018) 『通常の学級の特別支援教育 発達につまずきがある子どもの輝かせ方』

令和元年・2年度岡山県総合教育センター所員研究
(共同研究：特別支援教育)

—これからのインクルーシブ教育を見据えて—
「子供とつながる・子供をつなげる」～多様性を認め合う集団づくりを中心に～
研究委員会

指導助言者

青山 新吾

ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童心理学科准教授

協力委員

岡山県内小学校指導教諭1名(令和元年度)
岡山県内小学校教諭 3名

研究委員

木下 聡子
片岡 一公

岡山県総合教育センター教育支援部長(令和2年度)
岡山県総合教育センター特別支援教育部長(令和元年度)
(現 高梁市教育委員会 学校教育課 課長)

小田 哲也
山根 亮
大江 理恵
小野 隆章
原田 将仁
吉永 綾子
村上 直也

岡山県総合教育センター教育支援部指導主事(班長)
岡山県総合教育センター教育支援部指導主事
岡山県総合教育センター教育支援部指導主事
岡山県総合教育センター教育支援部指導主事
岡山県総合教育センター教育支援部指導主事
岡山県総合教育センター教育支援部指導主事
岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事(令和元年度)
岡山県総合教育センター研修部指導主事
岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事(令和元年度)
(現 新見市立思誠小学校 教諭)

仲 哲宏

令和3年1月発行

—これからのインクルーシブ教育を見据えて—
「子供とつながる・子供をつなげる」
～多様性を認め合う集団づくりを中心に～

編集兼発行所

岡山県総合教育センター

〒716-1241

岡山県加賀郡吉備中央町吉川7545-11

TEL(0866)56-9101

FAX(0866)56-9121

URL

<https://www.pref.okayama.jp/soshiki/215>

E-MAIL

kyouikuse@pref.okayama.lg.jp

お問い合わせ 教育支援部 TEL(0866)56-9106

Copyright © 2021 Okayama Prefectural Education Center